# 4回、ひょっとすると5回かも

彦坂 登（ひこさか のぼる）（豊橋市大清水町）
1932（昭和7）年7月8日生まれ（88歳）成章中学一年

（前略）

## ■空襲警報により下校

戦争末期の昭和20年、私は成章中学の一年生でした。渥美線に乗って学校へは行きましたが、勉強どころではなく、来る日も来る日も鍬や備中を担いで、蔵王山の開墾と借り受けた畑に出向き、食糧増産に励みました。

私の記憶では、当時夏休みはなかったように思います。

終戦前日の8月14日、この日も朝から開墾に出かけていました。

はっきりした時間はわかりませんが、午前10時頃ではなかったかと思います。空襲警報が出たということで、作業は中止となり、家へ帰ることになりました。言ってみれば、避難下校、臨時下校、一斉下校となったわけです。

この日、どのような経緯で空襲警報が発令されたかわかりませんが、当時空襲警報で頻繁に下校したという記憶は、私にはありません。

しかしながら、学校からの通達としては「学校に来ていて空襲警報が出た場合には、①田原町内から通学している者は自宅へ帰る。②学校の寮へ入っている者は寮へ戻る。③それ以外の者は寄留地へ行く」となっていました。当然のことながら、自宅へ帰った者は自宅の防空壕へ、寮へ帰った者は寮の防空壕へ、寄留地へ行った者はそこの防空壕へ入って、身を守らなければなりませんでした。

寄留地というのは、万が一の場合を考えて、入学時に緊急避難所として学校に届けた家のことです。ほとんどの人は親せきの家をそれに充てていました。私の場合には、巴江神社近くの田中斎という家を寄留地にしていました。しかし、空襲警報が出たために、そこへ行ったことは一度もなかったです。これは他の生徒も同様でした。

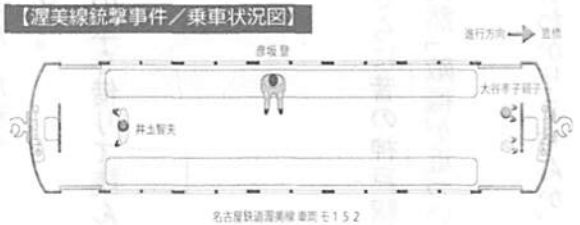
下校の折り、学校へは「寄留地へ行きます」と伝えたものの、足はいつものように田原駅へ向かいました。一緒に帰ったのは豊島、杉山、老津、植田、豊橋などから電車通学をしている10人近くの同級生です。

## ■電車発車

私は田原駅に来て、すぐに電車に乗りました。座ったのは、進行方向左の真ん中あたりだったと思います。電車が発車するまでに、待ち遠しかったという記憶はありません。たぶん駅へ着くまでに、空襲警報は解除されていたからです。

どうしたわけか、今でも私の頭から離れないことがあります。それは電車に

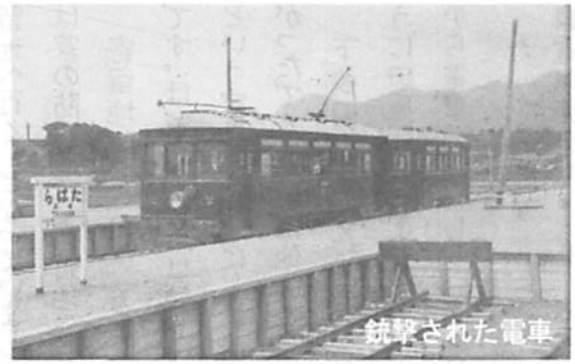
【渥美線銃撃事件／乗車状況図】



乗ると、横に座った杉山の山本芳郎君から漫画の本を借りたことです。漫画好きだった私が、「見せてくれ」と頼んで、読み始めたと思われます。当時、本はとても貴重なものでした。

この歳になり、昨日のことはすぐに忘れますが、下校の途中、電車の中で漫画の本を借りて読んだことだけは、いつまでたっても頭から離れません。

## ■米軍機飛来、第一撃



銃撃された電車

時間が来たのか、電車は発車しました。

発車してすぐのことです。汐川の鉄橋を渡り、さらに昔の神戸駅を過ぎて200~300メートル行ったところで、突然「敵機が近づいているぞ、鎧戸を閉めてー」と大声が響きました。

その声が運転手から出たのか、車掌から出たのかわかりませんが、その声に応えて、乗客みんなが、昔の鎧戸のような雨戸を閉めました。鎧戸というのは、百葉箱のよう遮光板で、使う時には下から上げるものでした。この時点で雨戸を閉めたのは、外から中の乗客が見えないようにするためです。

車内は薄暗くなり、異様な雰囲気が漂い、どこからともなく恐怖心が襲ってきました。電車はそのままのスピードで走っていました。

「危ないな」という予感がした直後のこと、ダダダーと凄まじいかんしゃく音が起きたのです。最初の機銃掃射でした。電車が走っていたのは、小野田セメントへ行く引っ込み線の分岐点がある手前だったろうと思います。目の前で何が起きたか、とっさには判断できませんでしたが、敵機が後方から、グワー、バリバリと前へ抜けた感じがしました。電車の側面からではありません。

「伏せろ」の号令に従って、私は夢中で電車の床に身をかがめ、両手で目と耳を塞ぎました。雨戸は閉めてありますので、外のことは何もわかりません。どこからか「電車を止めちゃあダメだぞ」の声が聞こえたような気がします。引っ込み線の分岐点を過ぎると、踏切を境に線路は右に大きくカーブを切っています。この踏切を過ぎ、しばらくして電車は止まってしまいました。天白変電所の手前あたりです。

床に這いつくばっていましたが、再度「伏せろ」の声に身をよじり、床にへばりつきました。

「何でこんなところ止まるのか、全速力で逃げやあいいものを」「こんなところに止まったら絶対に狙い撃ちされる。「何で速度を出して、豊島の駅の近くの森の中へ走りこまないのか」そんな声が聞こえたような気がします。

きっと運転手が早く止めて、乗客を外へ出したかったのか、電車が大事な電源装置かパンタグラフを機銃弾でやられたのか、どちらかだろうと思います。

敵機は小野田セメントの方からやって来て、発車したばかりの電車に狙いを定め、後方から機銃掃射を浴びせてきたのです。機銃掃射を受けても、そのまま電車は走っていました。

■車外脱出、避難

電車が止まったのは踏切を過ぎてからのことですが、その途端2回目の機銃掃射があったのです。「逃げろ」の声が出ました。男の声だったようです。車掌か運転手か、それも一役の乗客か、それはわからなかったです。

とっさにドアの方を見ると、右側が確かに開いていました。後から聞くと、井土智夫君は右側から出て、電車の前方を横切って、変電所の方へ逃げたそうです。その時は私も外に出ることに無我夢中で、車内の様子がどうなっていたのか、友達がどうなったのか、そうしたことは何一つ覚えていません。自分が飛び出そうとしている出口のこと以外、目に入らなかったようです。

私は電車の真ん中あたりに席を取っていたので、逃げ出したのは最後のほうでした。

出ると、必死になって線路脇の土手の斜面にへばりつきました。近くには誰もいなく、私一人だったようです。土手の斜面に伏せながら、上を見上げると、3度目の敵機が現れました。

飛行機をまじかに見るのは初めてです。操縦士の顔がわかるほど低空でした。身を乗り出し、顔は笑っているようでした。目の前を飛び去っても、すぐに旋回して来そうなので、森の方へ走り込むことができませんでした。

へばりついていた土手の、さらに上の方には森のような木もやが広がっていました。そう大きな木ではなく、杉か槍のようでした。

最初の一撃により、電車は止まってしまいましたが、そこは木が覆いかぶさっとるところではなかったので、敵機からは丸見えでした。

木もやの中へ入ろうとするなら、もっと先に行かなければなりません。もう少し先へ行くと、線路はしばらく登り勾配となりますが、豊島駅に近づくに従って、今度は下り勾配となり、そこからは線路の両側に大きな木が茂って、木のトンネルの中に入ることができたからです。

電車から飛び出し、土手を駆け上がり、木もやの中へ入った人は、たぶん敵機からは見えなかったと思われます。

私は土手にへばりついていても、いつまたやってくるかもしれない敵機の飛来に、恐怖心でいっぱいでした。

米軍機（P51）

■旋回、旋回、狙い撃ち

私は土手へへばりついて、機銃掃射を浴びせてくる敵機に身を縮めていました。

3回目、敵機が目の前を飛行してから豊島あたりを旋回し、田原駅方向の加治、黒川原上空を回った後、またここに狙いを定め、機銃掃射を浴びせてきました。一瞬のことですが、今度は目の

前を通り過ぎる時に、操縦士の顔をにらみつけてやりました。

この時の機銃掃射によって、撃った弾が電車の右に当たりました。それと同時に、近くの森の中には無数の弾痕が20センチくらいの間隔で、モグラが走ったようにできたのです。

敵機が田原駅方向の加治、黒川原上空を旋回するのも、豊島の方を旋回するのも、この目で確かに見ました。

4回目にバリバリと撃ってきた弾が、電車に当たったかどうかはわかりません。

私には、敵機はさらにもう一回旋回して来て、機銃掃射を浴びせてから、南の方へ飛び去ったような気がします。私には最低4回、ことによれば5回の機銃掃射があったと思われます。

追いつくばった土手には、電車の向きに沿った弾痕がやはり20センチ間隔でついていました。きっと電車の中には即死したり、負傷して動けなくなった人がいたものと思われました。

私は敵機が去ってから、森に中へ逃げ込みました。この中へ入れば、敵機に見つけられずに済んだからです。ひょっとしたら、また攻撃に来るのではないかの恐れもあり、電車から一刻も早く離れたい一心でした。

森の中へ入ってみると、弾が木に当たってるし、地面にはモグラが通る時にできるポコポコした盛り上がりの土跡が、一直線でついていました。

■自宅へ一目散

森から線路へ出て来ると、田原の街の方から青年4人が、雨戸を持ってやって来るのが見えました。雨戸は担架にして、ケガ人を渥美病院へ運ぶためのものです。

私は森から出て来ても、もう電車など怖くて近寄れず、すぐに鈴木忠明君と鈴木哲也君の3人で、家へ帰ることにしました。後で分かったことですが、漫画本を貸してくれた山本芳郎君は、ここで亡くなっていました。気の毒なことでした。

電車道（線路伝い）を歩き、豊島の鉄橋を渡り、紙田川の鉄橋の隅を通り、家へと急ぎました。朝出た大清水の自分の家へ着いたのは、午後4時近かったような気がします。

いつものように母親はいましたが、渥美線が襲撃を受けたことは全然知りませんでした。

母親は「何だお前ー？」というわけです。車内の床に伏せていたので、白の開襟服が他の人の血と肉片で、真っ赤になっていたのです。自分では気づかなかった自分の姿でした。

母親が言うには、私は一週間くらい顔が青ざめていたそうです。次の日か、そのまた次の日に、母親が植田の車神社にお礼参りに連れてってくれました。

私には一回り歳の違う兄がいましたが、その兄はガダルカナルで戦死していました。兄を戦争で失った上に、弟の私も戦争で亡くしてはいけないと、神様が守ってくれたに違いありません。

私が無傷だったのは神様のお蔭と奇跡の賜物で、自分の力では到底機銃弾から逃れることはできませんでした。70年たった今でも、神様と兄が私を守ってくれたと信じています。

（豊川流域研究会『証言 渥美線電車機銃掃射ー1945年8月14日の記憶ー』）